



愛隣幼稚園・・・・・・・・・・・・・・・・

園だより

・・・・・・・・・・・・・・・・09.9月号

私たちが残せるもの

長い夏休みが終わりました。皆さんお疲れ様でした。私も、いつ休んだかなあ・・・という夏休みでした。ですが、楽しくなかった訳ではありません。いつもはできない事を子ども達と一緒に経験し、今年も家族の思い出が1つ増えた夏休みでした。

九州の高原で夜空いっぱいの星を見ました。妹の家族も一緒でした。娘たちは「すごいね～こんなにいっぱい。あっ、今、流れ星！見た？」「見た、見た！」と興奮気味。でも、私と妹の思い出の中には、この星空が足元にも及ばないような星空の記憶があります。7歳の頃、長野県穂高で見た星空。真っ暗な空を埋め尽くすほどの星。その輝きは手が届くのではないかと思うくらい間近にあり、怖れすら覚えるほど。これほどたくさんの星が実はこの夜空で輝いている。私たちはそれを見たことがなく、知らないだけ。そんなことを思い知らされた星空の思い出です。あんな経験はそれっきり、たった一度の経験で、私より幼かった妹も記憶している衝撃的な思い出であり、家族が共有したすてきな思い出です。自然の圧倒的な美しさに出会わせてくれた両親に感謝します。家族の思い出は出かけた時だけではありません。一緒に過ごした時間、読んでもらった絵本、ハンドメイドのなにか、何かに一生懸命だった親の姿、ほめられたこと、叱られたこと、泣いたこと、笑ったこと、たくさんの記憶の中に家族の姿も残っていきます。親として私たちの姿は、子どもたちの思い出の中に確実に刻まれていくのです。大変なことです。素晴らしい親としての記憶だけが残るようにしてもらえないものだろうかと慌てます。が、私の場合はもう取り返しのつかないところまできているような気がします。親子の時間はまだまだたっぷりあるというみなさんも、まさかこの先ずーっと模範的な親であり続けるなんて、そんな事は不可能です。だとすれば、私達に出来ることは、親として大人として人として子どもの記憶に残っても後悔しない生き方をすることぐらいでしょうか。簡単なことではありませんね。時にみっともない姿もありそうです。そんな時には、ごめんね、と謝ってやり直すことにしましょう。それだって、子どもには大事な親との思い出になるかもしれませぬ。厳格なだけの思い出も、私はちょっと面白みにかけるかなあと思います。少しずつこけてたけど頑張ってた、あの時叱られてよかったんだ、こんなお父さん(お母さん)見たことなかったけどすごいなあ、カッコいい！思い出の中のいろんな親の姿が、未来の自分のモデルになっていくこともあるでしょう。

終わりに、こんな事を考えていた時に、たまたま出会った言葉を皆様にもお届けします。

1945年、長崎で自らも被爆し重傷を負いながらもたくさんの負傷者の救護にあたった永井隆(医学博士)氏が、残していく子どもたちを思い病床でつぶった言葉です。

『美しい、潔い、ゆかしい思い出をのこしてやりたい』(「この子を残して」より)

自分自身の在り方を問われている思いがして、気持ちが引き締まりました。